

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中世以前では、肉、卵、脂肪、ウモウの確保というペンギン自体を利用することが、主なペンギンの被害でした。これが近代に入ると、資源開発もペンギンを脅かし始めます。

①そのテンケイ例が、グアノの採掘です。グアノとは、海鳥の糞や死骸、卵の殻、エサの魚の死骸が数千から数万年に渡って積み重なり、化石化した土層のこと。窒素とリン酸を大量に含んでいることが特徴です。このグアノに目をつけたのが、産業革命後に発展を遂げる化学工業業界でした。化学薬品には、窒素とリン酸が欠かせません。化学工業業界は、グアノを原料として大量に買求めます。おかげで、南アフリカや南米チリのペンギン生息地では、大規模なグアノ採掘が行われます。

この地に生息していたケープやフンボルトペンギンは、このグアノを掘って営巣していました。昔の人々もグアノを利用していましたが、ペンギンを尊重しながら少しずつ掘り出していたので、ほどよく共存できていました。Ⅰ、グアノが莫大な富になることが分かると、ペンギンなどお構いなし。あつという間に掘り尽くし、グアノはペンギン生息地から消え去ります。営巣地をなくしたペンギンは、仕方なく岩の上や土の穴に巣を作り始めるものの、繁殖数が大幅に低下します。

②近代になると、全く新しい敵もペンギンを脅かします。

②最も分かりやすい例が、帰化動物です。帰化動物とは、本来生息していない地域に、人為的に持ち込まれて野生化した動物のこと。この帰化動物が、ペンギンに襲いかかります。この被害が特に大きかったのがニュージーランドです。昔のニュージーランドには、ペンギンを捕食する動物は存在しませんでした。ペンギンやキウイなどの飛べない鳥がこの地で進化したのは、こうした理由からです。このニュージーランドに、入植者がイヌやネコなどの肉食獣を持ち込みます。これらの肉食獣が人の手を離れ、ペンギンを食べ始めます。陸上では全く無防備に進化したペンギンは為す術もなく、シダイに個体数を減らしていきました。

③ペンギンの新たな敵は、生き物だけではありません。物も、ペンギンの敵になる場合があります。その一つが車です。

Ⅱ、オーストラリアやニュージーランドでは、コガタペンギンが人のいる所を集団行進しています。こうした場所では、フラ道路に迷い込み、事故に遭うペンギンが後を絶ちません。危ないモノといえば、地球温暖化も挙げられます。ただ、この問題だけは、単純にペンギンにとって悪いことだけとはいえません。例えば、氷が多すぎる場所で繁殖するペンギンにとっては、温暖化によって氷が減ると、エサ場までの道のりが短くなるなどの利点が増え、繁殖に有利に働きます。しかし、今まで適度に氷があった場所では氷が減りすぎ、繁殖地や生息地が奪われることになり、深刻な問題と化します。④地球温暖化によって、数のバランスが崩れるのは間違いありません。しかし、ペンギンを含む生物にとって、地球温暖化はメリットとデメリットの両方があるのです。

④ペンギンには、壊滅的ダメージを受けて絶滅が心配される種類が多いのですが、増えている例もあります。この傾向は、人の手が加わりにくい場所で見られ、南極に生息する個体数は、減少からAに転じています。絶滅危惧種についても、飼育技術が発達して繁殖が順調に進んでいます。絶滅危惧種の生活環境が改善されれば、飼育個体を野生に帰すことができるかもしれません。

⑤ペンギンの被害対策も発達してきています。2000年6月にケープタウン沖で沈没したトレジャー号による重油大流出事故では、その対策が遺憾なく発揮されています。この事故では、油にまみれたペンギンを救出する際に成鳥を優先して保護する対策を取ります。これは「ペンギンの生存率は、成鳥で9割近くに達すのに対し、ヒナや亜成鳥が繁殖できるまで生存する率は2割弱」というデータを元に下した、苦渋の決断でした。⑥この決断が功を奏し、ボランティアなどの救出活動が素晴らしくキノウします。おかげで、事故が甚大だったにも関わらず、被災したケープペンギン2万羽の9割を野生に戻すことができました。

⑦このように、ペンギンにもキボウの光が差しつつあります。しかし、野生状態のペンギンが深刻な状況に置かれていることには変わりありません。まず、こうした状況を認識することが、ペンギンと人間の共存への第一歩なのかもしれません。

注1 営巣・・・動物が巣をつくること。

注2 亜成鳥・・・まだ大人になっていない鳥のこと。

(イ) どう 良一 『やっぱりペンギンは飛んでいる!』

